

平成 2 6 年 6 月 1 2 日現在

機関番号 : 1 3 5 0 1

研究種目 : 基盤研究(C)

研究期間 : 2011 ~ 2013

課題番号 : 2 3 5 2 0 4 5 9

研究課題名 (和文) 機能範疇によって導入される項の主語性と意味に関する研究

研究課題名 (英文) A study of the subjecthood and the interpretations of arguments introduced by functional categories

研究代表者

松岡 幹就 (MATSUOKA, Mikinari)

山梨大学・教育学研究科 (研究院) ・准教授

研究者番号 : 8 0 3 4 5 7 0 1

交付決定額 (研究期間全体) : (直接経費) 900,000 円、(間接経費) 270,000 円

研究成果の概要 (和文) : 人間の言語の文に主語や目的語として現れる名詞句は、行為者や対象など、その文の述語が表す出来事にどう関わるかによって、一定の役割 (意味役割) を与えられて解釈される。それぞれの名詞句が持つ意味役割は、名詞句が文節構造のどの位置に現れるかによって決まり、その点について、人間言語一般に通じる法則があると言われている。本研究は、主に、英語と日本語の心的態度を表す副詞や目的を表す不定詞句の研究を通じ、名詞句が持つ主語としての機能と意図性の解釈の関係を部分的に明らかにした。

研究成果の概要 (英文) : Noun phrases occurring as subjects or objects in human languages are interpreted by being assigned a certain role such as agent or patient (semantic role) concerning how they are involved in the event described by the predicate of the sentence. The particular semantic role each noun phrase bears is determined by where the noun phrase appears in phrase structure of the sentence. It is claimed that there is a general rule governing the assignment of semantic roles to noun phrases in human languages. The present research has brought to light a relation between the subjecthood and the volitionality of noun phrases through an investigation into mental-attitude adverbs and infinitival purpose clauses in English and Japanese.

研究分野 : 人文学

科研費の分科・細目 : 言語学・言語学

キーワード : 統語論 主語 機能範疇 副詞 叙述 位置変化構文 英語 日本語

1. 研究開始当初の背景

最近の多くの研究において、典型的な他動詞の外項は、動詞自身が選択する項ではなく、[1]に示すように、動詞句を補部として選択する機能範疇(ここでは軽動詞 v として表す、また語彙動詞は V として表示)によって統語構造に導入されるという見方がされている(Chomsky 1995, Kratzer 1995)。

[1] [_{VP} DP v [_{VP} V ...]]

この考えのもと、外項が持つ意図性の意味は、語彙動詞 V の役割によるものではなく、機能範疇 v からその指定部の項に与えられるもの、あるいは v -VP の複合構造から得られるものだとする分析が提案されている。本研究では、代表者がこれまで行ってきた英語の主語指向性副詞に関する研究を踏まえ、上記の外項が持つ意図性の意味は、軽動詞に限らず、機能範疇一般の指定部の項に与えられる特性であるという仮説を立てた。

英語には、reluctantly や willingly など に代表される、心的態度を表す副詞 (mental-attitude adverb、以下「MA 副詞」)があり、これらは意図性の意味を持つ項、典型的には、主語として現れる項と叙述関係を持つ(主語指向性)と言われてきた。例えば、[2a]のように、この種の副詞が単純他動詞を含む能動態の文に現れた場合には、動作主項としての主語の指示対象を叙述する(カッコ内に、副詞と叙述関係を持てる項および持てない項を示す)。一方、[2b]のように、問題の副詞が受動文に現れた場合には、対象項としての主語を叙述できる。

[2] a. Joan instructed Mary **reluctantly**.
(Joan/*Mary)
b. Mary **reluctantly** was instructed by Joan. (Mary/*Joan)

[2a]の主語は、[1]の DP と同様、 v の指定部に外項として導入され、その位置で意図性の意味を付与されると考えられる。[2a]の目的語は、VP 内にあり、機能範疇の指定部にはないので、問題の意味は持ち得ない。一方、[2b]の主語は、受動化によって VP 内から TP の指定部に移動し、機能範疇である T から意図性の意味を与えられると考えられる。

さらに、[3]に示すように、問題の MA 副詞が位置変化構文の目的語と前置詞句の間に現れた場合、主語または目的語のどちらの指示対象も叙述できる。

[3] a. John sent the boys **reluctantly** to the doctor. (John/the boys)
b. Mary put Susie **willingly** on the bed. (Mary/Susie)

この種の構文には、叙述を司る機能範疇 Pred

を主要部として、その補部に前置詞句、その指定部に目的語と同一指標を持つ PRO が現れる、small clause が含まれていると仮定する(Bowers 1993)。これを踏まえると、[3a]の例については、[4]に示すように、副詞が現れる位置が異なる2通りの構造が与えられる。

[4] a. [_{TP} John_i [_{VP} t_i sent_V [_{VP} the boys_j **reluctantly** t_v [_{PredP} PRO_j to the doctor]]]]
b. [_{TP} John_i [_{VP} t_i sent_V [_{VP} the boys_j t_v [_{PredP} PRO_j **reluctantly** to the doctor]]]]

[4a]では副詞が主節の動詞句内にあり、直近の機能範疇 v の指定部で意図性の意味を付与された主語名詞と結び付けられる。一方、[4b]では副詞が small clause 内に現れ、直近の機能範疇 Pred の指定部で意図性の意味を与えられた PRO と結ばれる。この PRO が目的語によってコントロールされているため、[3]において副詞が目的語にかかる解釈が得られると考えられる(Matsuoka 2011)。

引用文献:

- Bowers, J. (1993) The syntax of predication. *Linguistic Inquiry* 24: 591-656.
Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
Kratzer, A. (1995) Severing the external argument from its verb. In J. Rooryck and L. Zaring eds., *Phrase structure and the lexicon*, 109-138. Dordrecht: Kluwer.
Matsuoka, M. (2011) Mental-attitude adverbs and the structure of locative constructions. 山梨大学教育人間科学部紀要, 第12巻, pp. 277-284.

2. 研究の目的

- (1) 機能範疇の指定部に導入された項が意図性の意味を持つという考えについて、MA 副詞以外の現象にも目を向けながら、より広範な機能範疇について検証する。特に、MA 副詞と類似した特徴を持つ、目的を表す不定詞句の主語のコントロールについて分析を行う。その上で、MA 副詞について仮定した分析を再検討し、機能範疇一般の性質について考察する。
- (2) 英語では、位置変化構文の目的語と前置詞句の間に現れる MA 副詞が、主語または目的語のどちらとも叙述関係を結べるのに対し、日本語では、MA 副詞がそのような箇所にも現れても、主語にしか結び付けられない。両言語の間に見られるこの違いの要因について分析を行う。

3. 研究の方法

目的(1)について

上記の MA 副詞について見た特徴と類似した性質が、Minkoff (1994, 1997) によって研究されている英語の目的を表す不定詞句に見られる。[5a]のように、文頭に現れた不定詞の主語(PRO)が主節の目的語名詞によってコントロールされ得る。この場合、目的語名詞は有生でなければならず、[5b]のように無生物名詞は容認されない。

- [5] a. PRO_i to wind down, Mary put *John*_i in the bathtub.
b. * PRO_i to wind down, Mary put *the alarm clock*_i in the bathtub.

Minkoff は、この種のコントロールは、先行詞と PRO の間の局所的な構造関係によって成立するのではなく、有生名詞だけが担うことができる logophoric role という意味役割によるものだと主張している。さらに、logophoric role を担うことができるのは、句構造上の特定の環境に現れる項に限られるとされている。例えば、[5a]や[6a]のように目的語名詞の後にその指示対象の着点を表す前置詞句が続く場合には、目的語が不定詞の主語をコントロールできるが、[6b]のようにその種の前置詞句がない場合には、コントロールはできないと言われている。

- [6] a. (In order) PRO_i to get washed, the kidnapper took *Mary_i and John_i* to the lake.
b. * (In order) PRO_i to get washed, the kidnapper took *Mary_i and John_i*.

これはちょうど上記[3]の例で見た、MA 副詞が目的語名詞と叙述関係を持つ環境と同じである。また、Minkoff によれば、[5a]や[6a]の目的語の指示対象は意図性を持つと解釈され、この点も MA 副詞が叙述する名詞句の特徴と共通している。

さらに、Minkoff は、[7a,b]に見られるような、二重目的語構文の最初の目的語や、着点を表す前置詞 to の目的語もこの種の logophoric role を担うことができる項であると述べている。

- [7] a. I sent *the veterinarian_i* this (a foot stool) PRO_i to stand on.
b. Mary sent the platform to *the doctor_i* PRO_i to stand on.

これら二重目的語構文の最初の目的語や着点を示す前置詞 to の目的語については、最近の研究において、Appl(licative) と呼ばれる間接目的語を導入する機能範疇の指定部に現れるという分析が提案されている

(Pylkkänen 2008, Bruening 2010)。

もしこのような分析が正しければ、Minkoff において logophoric role を担うことができる項として挙げられているものは、いずれも何らかの機能範疇の指定部に現れ得る項(あるいは、[5a]や[6a]の目的語については、機能範疇の指定部の項と同一指標を持つ項：上記[4]参照)だと言える。これを踏まえると、次のような仮説が考えられる。

- [8] Logophoric role は、機能範疇の指定部に現れる名詞句に与えられる。

本研究では、この仮説の妥当性を検証すると共に、MA 副詞と叙述関係を持つ項についても同じ分析が適用できるかどうかを調べる。

目的(2)について

日本語では、[9]に見るように、MA 副詞が位置変化構文の目的語と前置詞句の間に現れても、副詞は主語の指示対象を叙述し、目的語にかかる解釈は得られない。

- [9] a. 主治医が 太郎を **いやいや** その病院へ 送った。(主治医/*太郎)
b. 太郎が 花子を **しぶしぶ** 車に乗せた。(太郎/*花子)

また、[10]に見るように、位置変化構文の目的語名詞は、目的を表す不定詞句の主語をコントロールできないようである。

- [10] a. * PRO_i 水を浴びるために、太郎が子ども達_iをプールに入れた。
b. * PRO_i 治療を受けるために、救急隊員_iがけが人_iを病院へ送った。

したがって、[9]と[10]のいずれにおいても、対応する英語の MA 副詞や不定詞句との間に違いが見られる。

このような違いが生じる要因として、以下の可能性を考える。上記[4]で示したように、[9]や[10]の例に対応する英語の位置変化構文には、機能範疇 Pred を主要部とする small clause が含まれており、その主語 PRO が MA 副詞と叙述関係を結び、あるいは不定詞句の主語をコントロールすると考えられる。他の機能範疇と同様に、Pred についてもその特性や出現の仕方が言語間で異なるということが考えられる。例えば、この範疇が何らかの理由で日本語の位置変化構文に現れないとすれば、[9]や[10]の事実も説明される。

引用文献：

- Bruening, B. (2010) Double object constructions disguised as prepositional datives. *Linguistic Inquiry* 41: 287-305.
Minkoff, S. (1994) How some so-called

‘ thematic roles ’ that select animate arguments are generated and how these inform binding and control. Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
Minkoff, S. (1997) On the syntax of local and logophoric control. In H. Bennis, P. Pica, and J. Rooryck eds., *Atomism and binding*, 269-293. Dordrecht: Foris.
Pylkkänen, L. (2008) *Introducing arguments*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

4. 研究成果

- (1) [5a]、[6a]、[7b]のように、着点を表す前置詞句を伴う位置変化構文において、動詞の目的語や前置詞の目的語が不定詞句の主語をコントロールすると解釈される場合、[8]の仮説の通りに、logophoric role を担う項が、関係する機能範疇の指定部にあると見なせるかどうかを検証した。前置詞句内に現れる照応表現の束縛や数量詞の作用域の解釈を調べたが、予測されたような結果は得られなかった。目的を表す不定詞句の主語のコントロールについて、[8]に基づいた分析が妥当かどうか、さらに精査する必要がある。
- (2) [7]に示したように、二重目的語構文の最初の目的語や、着点を表す前置詞 to の目的語も不定詞の主語をコントロールすることができるということだが、これらの項は MA 副詞の叙述の対象にはならないことがわかった。MA 副詞と叙述関係を持つことができる項は、一部の機能範疇によって導入される項に限られるようである。なぜこのような制限があるのかについて、また MA 副詞の叙述と不定詞句の主語のコントロールの違いについて、今後の研究で追究されるべきである。
- (3) MA 副詞が叙述関係を持つ項について、研究開始当初は、意図性の意味を持つことが条件であると考えていたが、そのような意味を持っていても叙述の対象とならない場合があることがわかった。その代わりに、問題の項には、機能範疇を介して MA 副詞と構造的な叙述関係を持つという制約が課せられていると考えることにより、当該現象が説明されることがわかった。この分析をまとめた論文を、2013年にアメリカ言語学会の機関誌に発表した。
- (4) 状態変化構文における目的語と形容詞句の叙述関係について、英語と日本語の間に見られる違いを形容詞句の統語的性質に還元する分析をまとめ、2013年に国際学会で発表した。同様な観点から、[9]や[10]に示した位置変化構文に見られる英語と日本語の間の違いも説明できるか

どうか、今後の研究で考察する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Mikinari Matsuoka, On the notion of subject for subject-oriented adverbs, *Language* 89, pp. 586-618, 査読あり, DOI: 10.1353/lan.2013.0047, 2013.

Mikinari Matsuoka, On so-called small clause constructions in English and Japanese, 山梨大学教育人間科学部紀要, 第14巻, 査読なし, pp. 265-271, 2013.

Mikinari Matsuoka, On the distribution of logophoric controllers, 山梨大学教育人間科学部紀要, 第13巻, 査読なし, pp. 272-278, 2012.

[学会発表](計2件)

Mikinari Matsuoka, Doubly-oriented secondary predicates in Japanese, *Japanese/Korean Linguistics* 23, 2013年10月11日, マサチューセッツ工科大学(アメリカ合衆国).

Mikinari Matsuoka, On “subjects” for subject-oriented adverbs, 関西言語学会第36回大会, 2011年6月12日, 大阪府立大学.

[図書](計1件)

都留文科大学英文学科創設50周年記念研究論文集編集委員会編、ひつじ書房、「言語学、文学そしてその彼方へ」、2013年, pp. 43-53.

[その他]

所属機関ホームページ研究者総覧：
http://erdb.yamanashi.ac.jp/rdb/A_DispeMail.Scholar

6. 研究組織

(1)研究代表者

松岡 幹就 (MATSUOKA Mikinari)
山梨大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：80345701

(2)研究分担者

該当なし

(3)連携研究者

該当なし